

# 記紀神話の成立過程

——天孫降臨神話を中心に——

神 田 典 城

古事記三卷・日本書紀三十卷のうち、古事記上巻と日本書紀卷一卷二は、高度に体系化された一連の神話になっている。一体、古代社会では、社会秩序（自然・文化・社会体制等を含む）が神話にそのモデルを持つという事は、神話学上の常識と言って良く、とりわけ、古代王権にとっての最重要事は、その王権を保持しているという事に、絶対的な正統性がある事を明らかにするところにある。そして、多くの場合、それは、王権が神意によって与えられたもの、或いは王権の保持者が、神（又は、神的な絶対者）に連なる者である事を表明するといった手段がとられる。いわゆる「王権（起源）神話」と呼ばれるものである。

この事から見て、記紀の中で、神話によって構成された冒頭部が担う役割は、自然秩序や文化的なものの起源を記すと同時に、以下の巻々に征服王朝の相貌を見せる、天皇を中心とした大和朝廷の政治支配が、上天にある聖なる存在に支えられたものであるという事を示すところにある、従って、天皇家の始祖ホノニギの出自が天つ神にある事を表わした「天孫降臨」の神話の有する意義には、極めて重いものがある。

ところで、このように「天孫降臨神話」は、記紀神話の中心主題と言っても過言でないほどのものなわけであ

る。しかし、そればかりでは無く、卑見によれば、この神話は、神話としての重要さと同時に、記紀神話が体系化されて行く、ある重大な一段階を知るための、有力な材料を提供していると思われる。

そもそも、「天孫降臨」の話を含む所伝は、数種の異伝が記紀に録されており、その異伝間の相異点のうち、殊に顕著な例としては、降臨の司令神、即ち、天孫ホノニギを地上へ降らせる神が、タカミムスヒ（高御産巢日神（記）・高皇産靈尊（紀））であつたりアマテラス（天照大御神（記）・天照大神（紀））であつたりする事が挙げられる。

この点に注目して、天皇家の祖たる皇祖神は元来タカミムスヒであり、アマテラスは後次的に、そのタカミムスヒに替わつて皇祖神の位置に据えられたのだ、という事を明瞭なたちで示したのは三品彰英博士であつた。<sup>(1)</sup>そして、アマテラスの皇祖神化が後次的なものであるとする論は、記紀の分析のみならず、松前健博士によつて、宮廷祭祀の方面からも裏付けられている。<sup>(2)</sup>

また、筆者自身も旧稿に於て、天孫降臨を含む所伝群について、高天原の主神の変遷と葦原中つ国の主神のあり方との関わりの分析を試み、三品博士の示された各異伝間の相異（後述）が、それぞれの伝承の成立時期の新旧に相応するものであり、しかもそれは、高天原の主神がタカミムスヒからアマテラスへ遷つて行く過渡的な各段階を示しているものであるという事を、あらためて確認し得た。<sup>(4)</sup>

そこで、本稿に於ては、そのタカミムスヒからアマテラスへの移行の様相の理解をより深める作業を通じて、記紀神話が構成されて行く過程の一端を明らかにしたい。

まず、本稿で主として取り扱う事になる、アマテラスとタカミムスヒの関係が複雑に錯綜している部分について、簡略に触れておこう。

その部分とは、記紀神話全体の流れから言うと、ごく常識的な呼び方に従えば「中つ国平定条」と、それに続く「天孫降臨条」に当る。

この条々は、書紀では巻二のはじめに当る第九段（岩波書店の古典大系本の段分けによる。以下同じ）に含まれるわけだが、そこに録された計九通りの異伝のうち、「中つ国平定」及び「天孫降臨」に関する記事を有し、且、比較検討に耐えるだけの内容を持つと考えられるのは、「本文」「第一の一書」「第二の一書」「第四の一書」「第六の一書」の計五種の異伝である。

ただし、この書紀の各異伝のうちでは、本文が最も内容豊富であって、古事記の該当部分と、多少の違いはあるものの、ほぼ同じ内容、同じ分量をカバーしている。

そこで、古事記と書紀本文とに従って、小見出し風にこの部分の話の展開を追うと、次の如くである。

① 天つ神による地上支配（統治）の宣言

② 葦原の中つ国への平定使派遣とその失敗

(a) 平定使はアメノホヒ

(b) 平定使はアメワカヒコ

中つ国平定

（つまり、古事記と書紀本文では、平定使の失敗が二度あった事になっている。）

③ 平定使の派遣と平定の成就

孫臨  
天降臨

④ 降臨神がオシホミミからホノニニギに交替

⑤ 天孫の地上への降臨

では、①～⑤の番号で示したそれぞれの内容が、書紀の他の各異伝に、どれだけずつ備わっているのかを見ておこう。

第一の一書 ②③④⑤（②はbのみ）

第二の一書 ③④⑤

第四の一書 ⑤

第六の一書 ①②⑤（②はbのみ）

（ただし、①～⑤と番号で示したそれぞれが、各所伝ごとに、段落で区切る事ができる程整然と記載されているわけでは無く、その内容を表わす記述が文中にあるという事である。）

これらを見るに、全体を通じて著しくかけ離れた説話素を録する異伝も見られず、記紀の両書は、当該箇所にあつて、ほぼ同一の話の流れの中にあると言つてよい。

なお、このうちの第六の一書については、文中の随所に「云云」として中略が施してあるので、①から②にかけて、又、②から⑤の間に、もともと一つづきにどれだけの話が含まれていた所伝であつたのかは不明である。

## 記紀神話の成立過程（神田）

異伝	要素	日本書紀本文	日本書紀第六ノ一書紀	日本書紀第四ノ一書紀	日本書紀第二ノ一書紀	古事記	日本書紀第一ノ一書紀
る神	(イ)	タカミムスビ	タカミムスビ	タカミムスビ	タカミムスビ とアマテラス	タカギノカミ とアマテラス	アマテラス
降臨する神	(ロ)	ホノニニギ	ホノニニギ	ホノニニギ	アメノオシホ ミミ、後にニ ギに代る	アメノオシホ ミミ、後にニ ギに代る	アメノオシホ ミミ、後にニ ギに代る
降臨神の容姿	(ハ)	真床追衾に包 まれた嬰兒	真床覆衾に包 まれた嬰兒	真床覆衾に包 まれた嬰兒	虚空で出誕し た嬰兒	降臨間際に出 誕した特別の 記載なし	降臨間際に出 誕した特別の 記載なし
降臨地	(ニ)	日向襲高千穂 峯	日向襲高千穂 添山峯	日向襲高千穂 穗日二上峯	日向穗日高千 穂峯	日向高千穂久 士布流多氣	日向高千穂 触峯
随伴する神々	(ホ)			アマノオシヒ ・アマクシツ オホクメ	アメノコヤネ ・フツタマ 諸部神	五伴緒(アメ ノコヤネ・フ トコヤネ・ア メノウズメ・イ シコリドメ・サ タマノヤ)・サ ルタヒコ	五部神(アメ ノコヤネ・フ トコヤネ・ア メノウズメ・イ シコリドメ・サ タマノヤ)・サ ルタヒコ
神器の授与	(ケ)				神鏡の授与	三種神器の授 与	三種神器の授 与
統治の神勅	(ト)					瑞穂の国統 治の神勅	統治の天壤 無窮の神勅

ところで、右に示した通り、五つの項目のうち、④⑤が天孫降臨条に当っており、この部分について三品博士の作成された要素表がある。

三品博士が、我々の知る事のできる天孫降臨神話の最も原初的な型態は、書紀本文のような、タカミムスヒの命令によって、ホノニギが真床追衾に包まれて日向に降臨するというものだったという事を、明確なたちで示されたのがこの表であった事からしても、これが、記紀の「天孫降臨条」の各異伝間の相関を考えるのに極めて有効なものである事が窺われよう。

筆者も、この表から多くの事を示唆されて来た。それは時として、三品博士御自身がこの表によって解かれた事どもにとどまらなかった。つまり、この表はそれだけ多くの問題点解明に役立つ可能性を含んでいるのであって、本稿も、この表を下敷きとして考察を進めるつもりである。

ただし、本稿に於ける筆者の立場からすると、この表を用いるにあたっては若干の注意が必要となる。

即ち、表の、書紀第二の一書の欄の「降臨を司令する神」の項を見ると、「タカミムスビとアマテラス」と、二神が併記されていて、隣りにある古事記の同じ箇所が「タカギノカミ（＝タカミムスヒの亦名）」とアマテラスとなつているのと同じであるかのように見える。

しかしながら、これは金井精一氏も指摘されているのだが、書紀第二の一書の両神のありようと、古事記の二神併記とは性格が異なる。と言うのは、書紀第二の一書は先に記した通り、③④⑤を含み持った所伝であるわけで、これを古事記の記述と比べてみると、古事記の場合、平定使派遣から後の部分で高天原の主神を記すのに、一例だけアマテラスが単独で書かれるのを除いて、他は全て、

高御産巢日神、天照大御神、亦諸の神等に問ひたまひしく……

天照大御神、高木神の命以ちて、……

と、二神を併記している。ところが書紀第二の一書では、二神の名が同時に記される事は全く無く、③④にかけての、中つ国平定から降臨の準備段階までは、

高皇産靈尊、乃ち二の神を還し遣して、……

高皇産靈尊、因りて勅して曰はく、……

という具合に、全てタカミムスヒ単独の行為として記してあり、それがいよいよオシホミミが地上に降るという所に来て、突如、

是の時に、天照大神、手に宝の鏡を持ちたまひて、天忍穗耳尊に授けて、……

と、それまでに全く名前の見られなかったアマテラスが、単独で登場する。つまり、主神が一連の話の途中でタカミムスヒからアマテラスへと交替しているという事になる。

従って、所伝全体として見るならば、確かに高天原の主神格は、タカミムスヒもしくはアマテラスという事になる。又、表の項目の「降臨の司令神」と限定して考えても、タカミムスヒが中心となっている話の中に、皇孫を地

上に降す旨の叙述があるところからすれば、この両神が共に降臨に関わっているのには違いないのだから、三品博士の表に両神の名を連ねてゐるのは、それはそれで、誤りという事は無いのだが、右に述べたような状態にある書紀第二の一書を扱うについて、「降臨の場面」に限つた場合には、その叙述にタカミムスヒが直接関与してない、アマテラス単独の伝承として扱つて良いものと考ええる。

ただし、だからと言って、この表に導き出された、第二の一書为天孫降臨が古事記より古い形である、という三品博士の結論が動くわけでは無い事、もちろんである（後述）。

## 二

前章で述べた事を念頭に置きつつ、あらためて表に戻ると、まず、(イ)の「降臨を司令する神」の欄に、タカミムスヒとアマテラスの名が並んでおり、名目こそ「降臨」という事になっているが、実は、これがそのまま、各所伝ごとに、その前段をなす中つ国平定の部分（①～③）をも一続きに含んだ範囲の、タカミムスヒからアマテラスへ高天原の主神が替わつて行く過程を示すものとなっている。

今、それについての筆者なりの理解を、旧稿をふまえて簡略に記しておく、タカミムスヒ一神の名が記されている書紀の本文、第六の一書、第四の一書が、この順で比較的古いグループであり、この三つの所伝には、全体を通じて、系譜的な記載以外に、全くアマテラスは登場しない。

次の書紀第二の一書は、前章で説明した通り、所伝の前半はタカミムスヒが主体としての立場を保っているが、肝腎の、天孫が実際に降臨する場面だけはアマテラスのものとなっており、降臨の仕方、タカミムスヒ単独のも



のよりやや饒々しくなっているようである。

それにしても、この所伝に於けるアマテラスの登場は、どう見ても唐突である事からすると、アマテラスの、神話体系への導入が、比較的に生な状態にあつて、タカミムスヒからアマテラスへ交替して行く極く初期の段階を示しているものように思われる。つまり、本稿の冒頭に述べた通り、天孫降臨は、天皇家の始源に直結しているのであり、その事を考慮してこの第二の一書を眺めるならば、「とりあえず（まず手始めに）天孫降臨の部分をアマテラスの話にした」といった状況を読み取る事ができよう。

そして古事記になると、中つ国平定条から天孫降臨条にかけて（②～⑤）両神はほぼ等しく主神としての立場を分けあっているかの如く、必ず両神の名は併記される。ただし、①の「天孫による地上支配」を宣言するのはアマテラス単独の事であり、又、併記とは言つても、中つ国平定が成功するあたりから後は、アマテラスの名がタカミムスヒ（実際には高木神とも書かれる）よりも先に記される事<sup>(7)</sup>。更に、タカミムスヒが、単独で記される事が全く無いのに対し、一例とは言え、アマテラスには単独で記される所（③）があるのを見ると、比較的、アマテラスの方が主体的であると思われる。

これが、一番左の欄に記された（つまり、最も新しい所伝と考えられる）書紀第一の一書となると、全くタカミムスヒは姿を消し、アマテラス一神が高天原の主神として、地上との交渉の一切を主宰している。

以上が、天孫降臨を含む各所伝の、タカミムスヒとアマテラスのありようの概略である。

ところで、表では、(ロ)(ハ)の各欄にもそれぞれに神々の名が要素として記入されているわけだが、卑見によればそれらの神々は、タカミムスヒを中心とする伝承に属するものと、アマテラス導入に伴つて記紀神話の体系に持ち込まれたもの、即ちアマテラスとセットになっているものとにグループ分けする事ができる。

はじめに(ロ)の項を見ると、降臨する神は全て例外無くホノニギであるが、表に明らかなように、アマテラスが降臨の司令神として登場している書紀第二の一書、古事記、書紀第一の一書では、これまた例外無く、はじめに予定された降臨神はアメノオシホミミであり、それがホノニギに交替するという話になっている。

このオシホミミは、アマテラスがスサノヲと天安河でウケヒを行った時に誕生した神で、今扱っている各所伝の系譜的記事によれば、アマテラスの子にしてホノニギの父とされている。

書紀本文

タカミムスヒータクハタチデヒメ

ホノニギ

アマテラスーオシホミミ

書紀第六の一書

タカミムスヒータクハタチデヒメヨロヅハタヒメ  
(又はホノトハタヒメーチデヒメ)

オシホネ  
ホアカリ  
ホノニギ

書紀第二の一書

タカミムスヒ—ヨロヅハタヒメ

ホノニニギ

（アマテラス）—オシホミミ

古事記

タカギ—ヨロヅハタトヨアキヅシヒメ

ホアカリ

アマテラス—オシホミミ

ホノニニギ

書紀第一の一書

オモヒカネ

ヨロヅハタトヨアキヅヒメ

ホノニニギ

アマテラス—オシホミミ

【以上、各所伝の系譜的記事を図式化して示した。ただし、書紀第四の一書には系譜的記述がなされていない。又、書紀第六の一書には、オシホネ（オシホミミのこと）自身の出自を直接的に示すような記述が無いので、親の所を空白にしておいたが、第七段（天の岩戸条）に於けるオシホネの誕生記事を前提とするならば、当然アマテラスの子となる。書紀第二の一書も同様だが、この所伝ではアマテラス自身がオシホミミに向って発する言葉の中に、「吾兄」という表現があるので、括弧つきで記した。】

従つて、ホノニギは、父親オシホミミを通じてアマテラスと、母親を通じてタカミムスヒ（書紀第一の一書だけは若干ニュアンスが異なるが、これは後の章で触れる事になる）と、新旧の両主神の血をひいているのだが、これをもう少し言えば、アマテラスが、オシホミミを通してホノニギに繋がっているという事になるのではないだろうか。

いま、天孫降臨に関して全く揺るぎの無い事実「ホノニギが日向に降る」という事だけであつて、これは、考え得る限りの所伝の新旧と関係が無い。従つて「天皇の祖先は天から降つてきたホノニギにはじまる」というのは、記紀神話にあつて、最も基本的、もしくは神聖にして動かし難い伝承であつたと認めて良からう。

それでは、そのホノニギはどこへ繋がっているのが本来なのか。

天孫降臨にアマテラスが関与していない書紀本文、同第六の一書、同第四の一書を見ると、天孫降臨に際してオシホミミの名は出て来ない。系譜的記事の無い第四の一書はともかくとして、右に系図を示したという事からもわかるように、オシホミミがホノニギの父親である事をその所伝の中で明示している本文、第六の一書ですら、天孫降臨の場面にオシホミミは登場していない。つまり、この三つの異伝でオシホミミの名が記されるのは、系譜的記事に限られているのである。

翻つて、アマテラスが関与している各所伝では、例外なくオシホミミが登場している。しかもそれらの所伝では、オシホミミこそがもととは地上へ降るべき神だったとされていて、その母親であるアマテラスの権威を高める事になっている。そして、その一方で、タカミムスヒの影は相対的に薄くなっている。

なお、ついでに言えば、古事記と書紀本文、同第六の一書に見られる①「天つ神による地上支配の宣言」を比べると、タカミムスヒ中心の所伝である書紀の両所伝では、「タカミムスヒが、ホノニギを」地上へ降す事になつ

ている。ところが、古事記では「アマテラスがオシホミミを」降そうとしている。しかも、先に述べたように、ほとんどアマテラスとタカミムスヒとを併記するのに、ここは、アマテラス単独のしわざとされている。

これなどは、アマテラス・オシホミミ・タカミムスヒ・ホノニギの四神間に於ける相互関係を極めてシンボリックに示している例であろう。

このように、アマテラス・オシホミミに関して、それぞれ三つずつの異伝のグループは、みごとな対照を見せている。そしてまた、天孫降臨に限らず、所伝全体にアマテラスが主体となっている古事記や書紀第一の一書では、タカミムスヒ中心の所伝に於けるタカミムスヒの立場にアマテラスがある事は当然として、例えば、タカミムスヒ中心の所伝では、地上世界が好ましからざる状態にあると観するのがタカミムスヒであるのに対し、古事記、書紀第一の一書で「豊葦原の千秋長五百秋の水穂の国は、いたくさやぎてありなり（記）」「彼の地はさやげり。いなかぶ凶目（シコメ）き国か（紀第一の一書）」という言を発するのがオシホミミであるところを見ると、タカミムスヒ中心の所伝でタカミムスヒの果す役割りを、これらの所伝ではその一部をオシホミミが受け持ってもいるのである。

即ちその果す役割りから言うと、タカミムスヒ、アマテラス、オシホミミの力関係は、

タカミムスヒ・アマテラス・オシホミミ  
 （タカミムスヒ） （アマテラス）  
 （中心の所伝） （中心の所伝）

と図式化され得るような状況にあるように思える。

又、系図に戻ると、オシホミミはタカミムスヒの女（ムスメ）を娶る事によってタカミムスヒと繋がっているのだが、このような系譜的なものが極めて造作され易いという事は、記紀の冒頭の神系譜、又、新撰姓氏録などを引

き合いに出すまでも無からうし、婚姻関係を結ぶというのは、別々の二つのものを繋げるための常套手段である事も、今更に説明の要も無からう。

従って、以上に述べて来た諸条件と、冒頭で述べた「高天原の主神はタカミムスヒからアマテラスへ交替」という論を勘がえると、「タカミムスヒ・ホノニギ」というセットが元にあり、そこへ「アマテラス・オシホミミ」というセットが「タカミムスヒの女」というものを媒介として導入されたのだという経緯が容易に想定できよう。

ただし、タカミムスヒの女（「ハタ」を名の中心に持つ女神）がもともとあったものか、あるいは、アマテラス導入に伴って造作されたものかどうかは、筆者には今のところ何とも言えない。

次に、(㉔)の項の降臨に随伴する神々について見てみよう。

まず、書記第四の一書にアマノオシヒ・アマツクメの二神の名があり、古事記に記された神々の中に、アマノオシヒ・アマツクメの名がある。

両書でアマクシツオホクメ（天穗津大来目）・アマツクメ（天津久米）という具合に、名称に多少のずれはあるが、両方とも「クメ」氏の祖（書記第四の一書⇨来目部の遠祖・古事記⇨久米直等の祖）となっているので、ほぼ同一の神と見做しておいて不都合は無からう。（以下、繁瑣になるのを避けて「クメ」と記す）

この大伴の祖「オシヒ」と久米の祖「クメ」の両神は、天孫の降臨に際し、武器を携えて前衛の役目を果たたとされ、両氏族が大和政権の下、軍事を以ってつかえる由緒ある氏族である事を証している。

ところで天孫の降臨に際し、随伴神の記載があるのは、表にも明らかな如く、書記第四の一書、同第二の一書、古事記、そして書記第一の一書の四異伝であり、このオシヒ・クメの両神は、そのうち、書記第二の一書と同第一

の一書には登場していない。もっとも、第二の一書には、諸部神とされる神々があつて、この中に二神が含まれはせぬかという疑いが起るかもしれないが、大系本の頭注は、これを、その前に出て来る神事の用具を製作する神々を指すとしている。<sup>(8)</sup> しかも諸部神（モロトモノヲと訓ず）という言い方は、古事記や書紀第一の一書の「五伴緒（イツトモノヲ）」や「五部神」といったものに通じるものであろうが、この二神は五伴緒にも五部神にも含まれていない。従つて、両神が「諸部神」の中に潜在的に含まれている事は無いと考えて差支え無からう。

更に言えば、記紀の記述からすると、このオシヒ・クメ両神は、五部神等を含む他の随伴諸神とは、別の範疇に属すると見られる。

即ち、他の諸神は、降臨の準備段階とおぼしき所（随伴の命が下される部分）に名が列挙されているのに対し、オシヒ・クメ両神は、その名が記されている第四の一書・古事記に於て、それらの諸神と並んで名前が列挙される事は無く、「天磐戸を引き開け、天八重雲を排分け……」<sup>(9)</sup>（紀）という、ホノニギが実際に天降りつつある情景を描写している文脈の中にのみ登場している。

この事から考えると、同じく天孫に随伴する神々とは言つても、その質が、オシヒ・クメ両神と他の諸神とは、大いに異つているという事にならう。

そこで、両神の名の見える第四の一書・古事記のグループと、第二の一書・第一の一書のグループとの間を見比べると、最も著しい相違はやはり、タカミムスヒとアマテラスの事になる。

表の(イ)の項でもわかるように、第一の一書は、タカミムスヒが全く登場せず、全てアマテラスが中心に据えられている所伝である事は既に述べたところである。又、第二の一書は前章で論じた通り、天孫降臨の場面に限つては、アマテラス単独の所伝であるわけで、今の場合、随伴神と言うのは、ほかならぬ降臨の場面に登場する神々の

事なのだから、ここで扱うべき第二の一書は、アマテラス中心の所伝と言って良い。

つまり、オシヒ・クメ両神は「タカミムスヒが天孫の降臨場面に関与しない所伝には、登場しない（否定形を重ねたもつてまわった言い方になっているが、古事記の二神併立の様態が微妙なので、このような言いまわしの方が、より正確であろう）」という事なのである。

そして同時に、(ホ)の項に記されている、この両神以外の神々について、丁度これと正反対の事が言えるわけで、アメノコヤネ、フトタマをはじめとする他の諸神は、「アマテラスが天孫の降臨場面に関与する所伝に登場する」。従って、この(ホ)の項に記された神々も、タカミムスヒとアマテラスのありようを基準として、截然と二つのグループに分ける事ができるのである。

以上、(ロ)、(ホ)の項に記入された神々が、タカミムスヒを中心とする伝承に属するものと、アマテラス導入に伴って持ち込まれたものに分けられるという事を述べて来たが、ここで、それをまとめたかたちで示しておこう。

タカミムスヒ関係

ホノニギ

アマノオシヒ

アマクシツオホクメ（アマツクメ）

アマテラス関係

オシホミミ（オシホネ）



アメノコヤネ

フトタマ

アメノウズメ

イシコリドメ

タマノヤ

オモヒカネ

タヂカラヲ

イハトワケ

トユウケ

サルタヒコ

---

五伴緒（五部神）

ところで、右のアマテラス関係に分類した神々の中に、従来あまり注目されていないが、卑見によれば、タカミムスヒとアマテラスのありよう、ひいては記紀の神話体系の成立過程を考えるのに極めて重要な示唆を与え得ると思われる神がある。オモヒカネがそれである。そこで、次にそのオモヒカネを中心に据えて論を進める事とした  
い。

三

オモヒカネの恐らく最も顕著な特異さは、アマテラスと、他に例を見ない程の緊密さで結び付いているという点にある。無論、前章でアマテラス關係に挙げてある神々は、皆アマテラスと関わりがあるのに違いないのだが、オモヒカネは、常にアマテラスの名と共にあると言つても過言では無い。

その第一には、天孫降臨の随伴神に列挙される神々の中で、その前段をなす中つ国平定条にも登場するのは、このオモヒカネのみであり、しかもその役割が決して軽いものではないという事が挙げられる。

中つ国平定条（②と③）を含む所伝は前述の通り四種あり、そのうち、アマテラスが中つ国の平定に關与しているのは古事記と書紀第一の一書とである。オモヒカネはこの両書の中つ国平定条に登場し、そこで、中つ国へ派遣する平定使についてアマテラスに助言をするという、言わば政策を決定するためのブレーションといった、重要な役割りを果たしている。

爾に高御産巢日神、天照大御神の命以ちて、天安河の河原に、八百萬の神を神集へに集へて、思<sup>オモヒ</sup>金<sup>カネ</sup>神に思はしめて…（略）…爾に思金神及八百萬の神、議り白ししく、……

高御産巢日神、天照大御神、亦諸の神等<sup>ニ</sup>問ひたまひしく…（略）…爾に思金神、答へ白ししく、……

天照大御神、高御産巢日神、亦諸の神等<sup>ニ</sup>問ひたまひしく…（略）…是に諸の神及思金神、「雉、名は鳴女を

遣はすべし。」と答へ白しし時に、……

天照大御神、詔りたまひしく…（略）…爾に思金神及諸の神白ししく、……

（以上古事記）

故、天照大神、乃ち思兼神オモヒカミを召して、其の来ざる状を問ひたまふ。時に、思兼神、思ひて告して曰さく、…（略）…是に、彼の神の謀に従ひて、……

（書紀第一の一書）

これらの記述を見るに、古事記では、諸神との合議を主宰し、その結果を申し述べるといった態である。又、書紀の方では、一例しか無いのでそう断定的な事は言えないかと思うが、アマテラスの諮問に単独で案を示しているといった風で、微妙な相異はあるものの、どちらにしろ、アマテラスにとっての最良の相談役といった立場にある事は、明瞭に読みとれよう。

それでは、次にオモヒカネとアマテラスの結び付きの第二点について見てみよう。

前章で、天孫降臨の随伴神の事を取り上げたが、その随伴神の多くが「天の岩戸条（書紀の第七段に当る）」に登場する神々でもあるのは、よく知られている事である。その事実から「天の岩戸」と「天孫降臨」の話とは、本来一続きのものであったのであり、現在の記紀神話のかたちは、その中に、いわゆる出雲神話が割り込んでいるのだ、とする論が行なわれている程に、この両神話はどうやら密接な関係にある。

オモヒカネも、他の随伴神と同じく天の岩戸条に登場している。そして、ここでもアマテラスとの関係が顕著なのである。

天の岩戸条は、日本書紀に本文と三つの一書が録されており、古事記と合わせて五種の異伝がある。

ところで、記紀神話のうち、日月の誕生（書紀第五段）から天の岩戸に至る部分は、全て太陽神とスサノヲの葛藤を軸として展開しているのだが、その中心となるべき太陽神の呼称に「天照大御神」と「日神（ヒノカミ）」の二通り（より正確にはオホヒルメというのもあるが、ここでは大づかみに二通りとしておく）あり、いま見ようとしている天の岩戸条の五種の異伝に於ても、所伝によってアマテラスとヒノカミの別がある。<sup>⑩</sup>

即ち、古事記、書紀本文、同第一の一書はアマテラスを用い、残りの書紀第二の一書、同第三の一書はヒノカミと記している。

そこで、この条に名を見させている、太陽神が岩戸に隠れた時、それを外へ引き出す手だてをはかる場面に登場する神々を整理しつつ列挙してみよう。

古事記

オモヒカネ

アマツマラ イシコリドメ

タマノヤ

アメノコヤネ フトダマ

アメノタヂカラヲ

アメノウズメ

書紀本文

オモヒカネ

タチカラヲ アマノコヤネ

アマテラス

フトタマ

アマノウズメ

書紀第一の一書

オモヒカネ

イシコリドメ

書紀第二の一書

アマノアラト

フトタマ

トヨタマ

ヤマツチ

ノヅチ

アマノコヤネ

書紀第三の一書

アマノコヤネ

イシコリトベ

アマノアカルタマ

アマノヒワシ

フトタマ

アマノタチカラヲ

ヒノカミ

（神名の順序は、単純に各所伝ごとの記載順とした）

このうち、四角く囲ったのは、アマテラスを用いた所伝だけに名の見える神、無印はヒノカミを用いた所伝だけに名の見える神、そして、波線を施したのは、両方に登場する神である。（タマノヤ・トヨタマ・アマノアカルタマは、玉作部の祖という事で、同神として扱った）

これを見ると、オモヒカネとアメノウズメだけがアマテラスの呼称を用いた所伝に限って登場している事がわか

る。そして更にそのうちでも、オモヒカネだけがアマテラスの呼称を用いた所伝の全てに名を見せている。つまり、ここでもオモヒカネは、あくまでもアマテラスの名と共に存在し、しかも、左に見るように、登場する各所伝で、最も重要な立場を与えられているのである。

故是に天照大御神見畏みて、天の石屋戸を開きて刺こもり坐しき。…（略）…是を以ちて八百萬の神、天安の河原に神集ひ集ひて、高御産日神の子、思金神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集めて鳴かしめて、…（古事記）

天照大神…（略）…乃ち天石窟に入りまして、磐戸を閉して幽り居しぬ。…（略）…時に、八十萬神、天安河辺に会ひて、其の禱るべき方を計ふ。故、思兼神、深く謀りて遠く慮りて、遂に常世の長鳴鳥を聚めて、互に長鳴せしむ。

（書紀本文）

天照大神、…（略）…乃ち天石窟に入りまして、磐戸を閉著しつ。…（略）…故、八十萬の神を天高市に会へて問はしむ。時に高皇産靈の息思兼神といふ者有り。思慮の智有り。乃ち思ひて白して曰さく、「彼の神の象を図し造りて、招禱き奉らむ」とまうす。

（書紀第一の一書）

これらの記述で明らかのように、オモヒカネは、アマテラス不在の神界で、諸神の中心となつて対策を慮り、また指令を発してもおり、こういった姿は、先に見た中つ国平定条でのオモヒカネが、アマテラスの下にあつて具体策を案ずるのと全く軌を一にしていると言って良い。

こうして見て来ると、オモヒカネは、母子の關係にあるオシホミミは別格として、アマテラスの下にある神々の中で最も上位の神、或いは俗な言い方をすれば「片腕」的な立場にある者の如くであり、しかも、記紀に包摂されている数々の神話伝承のうち、アマテラスの名の記されている所伝に、この神ほどの濃密さで登場する神は他には無い（もちろん、もっと目につく神もあろうが、それらは大概アマテラスの名称を記さない所伝にも顔を出している）。

従って、記紀の神話体系に名を列らねている数多の神々の中で、オモヒカネこそが、アマテラスと最も緊密なセットをなしているのである。

このように、從來あまり重要視されなかった、目立たない存在であるオモヒカネには、右に試みた如き比較的表面的なデータ処理からだけでも、アマテラスと極めて深い關係があるという事実が浮び上がって来た。これは、それだけで十分注目に値する事であらう。しかし、実は、オモヒカネとアマテラスの事は、単にセットになっている、ただ同じ所伝に名があると言うだけの問題では無く、もっと根の深いものがあると思われる。

それは、この事が、本稿の冒頭から繰り返し述べている、アマテラスがタカミムスヒのあつた位置に据えられて行く過程の中で起って来た事だと考えられるからである。

#### 四

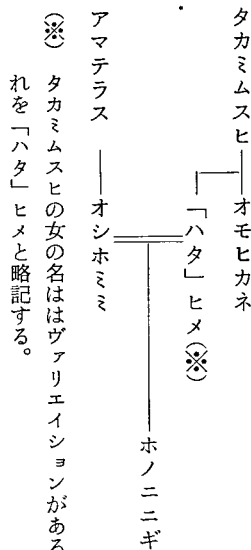
先に掲げた系図でもわかる通り、書紀第九段第一の一書を見ると、

天照大神、思兼神の妹萬幡豊秋津媛命を以て、正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊に配せまつりて妃として

となっていて、他の所伝では明らかに「タカミムスヒの女」とあるべき所が「オモヒカネの妹」となっている。

一方でまた、天孫降臨条と密接な継がりがあると考えられている天の岩戸条では、古事記と書紀第一の一書に、オモヒカネをタカミムスヒの子としている。

従って、この両方を視野に入れる事ができれば、



という系図を構成する事になるわけで、オモヒカネがタカミムスヒの子であるならば、タカミムスヒの女である「ハタ」ヒメは、確かにオモヒカネの妹であって何の矛盾も無い。

しかしここで、あらためて第一の一書を見直してみると、この所伝はタカミムスヒがアマテラスに置き替わって行く状況の、現在我々が知る事のできる最終段階を示しているのである。

即ち、降臨神がホノニギである点こそ他の所伝と変わり無いが、随伴する神々の中に、タカミムスヒのグループに属する「オシヒ」「クメ」二神の名は無い。そして、唐突な連絡を思わせる書紀第二の一書、両神融合をはかったかのような古事記と異なり、「一書曰」の書き出しから終わりまで、高天原の主神はアマテラスただ一神で、



タカミムスヒの名は一切見られない。

しかしながら、「タカミムスヒの名」が記されていないからと言って、完全にタカミムスヒと無縁になったわけでもないらしい事は、右の如き系図が、復元し得る事からも推察できよう。そこで、そのあたりの事を考えるに当って、ここまでも何度か言及して来た「記紀神話体系へのアマテラスの導入」という問題について稍詳しく述べておきたい。

天孫降臨に関して最も古態を存すると考えられ、又、所伝全体を通じても終始タカミムスヒ一神が中心に据えられている書紀第九段本文は、その冒頭にタカミムスヒの女「ハタ」ヒメの夫であるオシホミミと、その母としてアマテラスの名を記している。それも、文章自体の叙述のしかたから見て、この所伝で実質的に中心となるタカミムスヒの事よりも、「アマテラスの孫がホノニニギである」事を示すためと思われる系譜記事によっている。

天照大神の子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、高皇產靈尊の女栲幡千千姫を娶きたまひて、天津彦彦火瓊瓊杵尊を生れます。

従つて、実質的にタカミムスヒ一神が中心とは言つても、所伝全体として見れば、降臨神ホノニニギがアマテラスの血をひいている事を示すこの系譜記事を前提とする以上は、天孫降臨という大事が、それを取り仕切っているのがタカミムスヒであるとしても、アマテラスとも密接な関係にあるという事になるようにできているのである。

何故このようにできているのかと言えば、それは、記紀神話が、恐らくタカミムスヒを祖とする降臨神話をその原型に持ちながら、アマテラス（太陽神）中心の神話を目指した事によると考えられる。

即ち、現在の我々が見る記紀神話は、「中つ国平定・天孫降臨」の前に、日月誕生から天の岩戸に至る、アマテラスを中心とした神話が存在している。

ところが、その神話は、タカミムスヒと直接的な関係を持っていない事が明らかである。それは、タカミムスヒがその中に直接登場する事が無いという事ばかりでは無い。例えば、先に、天孫降臨の随伴神の多くが天の岩戸条にも登場するという事に触れたが、その、両方の所伝に登場する神々というのは、

アメノコヤネ フトタマ アメノウズメ イシコリドメ タマノヤ オモヒカネ タヂカラヲ

の七神で、これは一見して明らかなように、先にアマテラスに属すると認めた神ばかりである。これもネガティブにはあるが、タカミムスヒと天の岩戸条との無縁さを証するものである。

従って、記紀神話体系の形成過程の一つの段階として、タカミムスヒを中心とした「中つ国平定及び天孫降臨神話」への、アマテラスに象徴される太陽神話の導入という事を想定するならば、専らアマテラスが中心で、タカミムスヒと本来的な関わりが無いと考えられる「日月誕生」から「天の岩戸」までの条々は、その段階で記紀神話に定着された事になろう。

そして繰り返すが、中つ国平定・天孫降臨神話の各要素の相違、又、その要素の一つでもある中つ国の主神のありようといった諸々の条件から見て、その逆、つまり、アマテラス神話へのタカミムスヒ神話の導入という事は、極めて考えにくい状況なのである。

もちろん、記紀神話の冒頭を飾る神々の出現の神話やイザナキイザナミの国生み神生みの神話、又、天の岩戸条

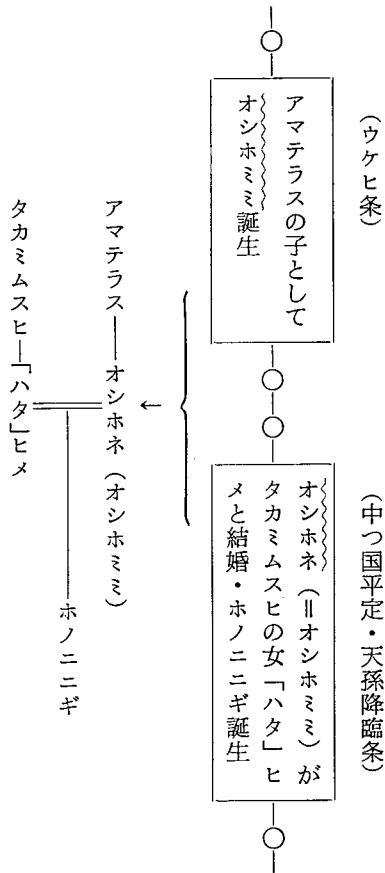
と中つ国平定条の間にはさまっている、スサノヲからオホナムチ（大国主神）に至る、いわゆる出雲神話などもともとタカミムスヒ中心の中つ国平定及び天孫降臨神話と、どのような関係にあったのか、どのような形で存在していたのかは、今のところ不明としか言いようがない。しかし、少くとも、タカミムスヒとアマテラスという、大和朝廷の始源に関わる、現実的な意味に於て最重要の二神に問題を絞って見るならば、右に述べた如き段階を想定する事が可能であろう。

ただ、不明とした事のうちに、出雲神話に関してだけ述べれば、「平定されるべき地『出雲』<sup>(11)</sup>」という図式が、タカミムスヒ中心の所伝に見られる事（中つ国平定条の存在）。又、普通言われる「出雲神話」の後半部（オホナムチの国作り―書紀では一書扱い）に、アマテラスの名は見えないのに対し、書紀に録された所伝では、タカミムスヒがスクナヒコナの親ということで名を見せている事。更に、筆者が旧稿に於て論じたところで明らかなように、アマテラスよりもタカミムスヒの機能に属する要素が、中つ国平定の話の基本となっている事等々<sup>(12)</sup>を考え合わせれば、オホナムチを主神とした出雲神話は、アマテラスの導入よりは早い時期に、何らかの形でタカミムスヒ中心の天孫降臨と結合していたと言って良いだろう。

ともかく、タカミムスヒを主とした地上平定・ホノニギ降臨という所伝の前に、アマテラス（太陽神）の誕生及び御子オシホミミの誕生を含む所伝が置かれ、この母子神を、ホノニギと系譜づける事によって話としての一貫性が生じるようにされた、というような経緯が、アマテラス導入の第一歩として考えられるのではないか。

最も古態を存する書紀第九段本文が、その冒頭にアマテラスを主体とした書きぶりの系譜を掲げている。その一方で、本文よりも比較的新しい段階にあると考えられる第六の一書が、アマテラスの名は記さずに、オシホネがタカミムスヒの女と婚した事のみを記している。

無論「一書」である事からすれば、省略も考えられはするが、この所伝よりも前にある（第六段）オシホミミ誕生の記事を前提としているならば、これだけで十分にアマテラスとの繋がりを示せるわけで、或いは、アマテラス導入の初期には、このような形だったのではないだろうか。



それが、書紀編纂に際し、天孫降臨を含む第九段の本文として、如何なる理由によつての事かという問題は今は置いて、ともかく、アマテラス化の流れに抗して（その時期までに、アマテラス中心の天孫降臨神話が用意されていた事は、第一の一書が存在しているという事実が示している）最も古態を存するタカミムスヒ中心の所伝が採用された。そして、天地開闢から一貫した流れの中にあるべき「本文」として、その第九段より前に存在する、アマテラス中心の神話との統一をはかるために、先に引用したような、アマテラスを前面に押し立てた系譜記事となつ

たものではなかったか。

無論、ここに述べて来たのは、想像を逞ましくしての臆測に過ぎない。しかし、例えば、先にも触れたように、第六段・第七段では、中心となる太陽神の名前にアマテラスとヒノカミの二種類があるところを、本文にはいずれもアマテラスと記す所伝を用いている事。又、その前の第五段に、日月誕生の本文として古事記のような単性生殖型の所伝（恐らくアマテラスの名称と結びつきがあると思われる）<sup>(13)</sup>は採らなかったものの、

是に共に日の神を生みまつります。大日靈貴と號す。

と記した後に、割注ながら

一書に云はく、天照大神といふ。天照大日靈尊といふ。

と記して、この「日神」としたのが、以下の段の本文の中心となるアマテラスに当る事を示している。しかもそれと同時に、この段の、三貴子誕生を記した異伝の、それぞれに異なる名称を用いられている太陽神が、全て同じ神に当る事を示していて、神話の全体の流れの統一をはかっていると考えられる。これを見ると、右に述べた臆測の、「一貫した流れの中にあるべき本文」というのも、あながち的はずれでもないのではないか。

ともかく、少くとも、アマテラスの子オシホミミを、ホノニギの父親とする事によって、天孫降臨とアマテラスのつながりが演出されるのだが、それはやがて、この章のはじめに見たような「天孫降臨そのもののアマテラス

化」を指す事になる。そして、その「天孫降臨のアマテラス化」が強まる事は、タカミムスヒの影を薄くする事とイコールなわけで、その仕掛けのかぎが、オモヒカネをタカミムスヒの子としたところにあつたと考えられるのである。

それでは一体、オモヒカネがタカミムスヒの子であると書かれる事にどれ程の意味がある事になるのかを考えてみよう。

単に、「タカミムスヒの子オモヒカネ」という記述だけを眺めるならば、それはそれだけの事にすぎない。しかし、先にも記したように、オモヒカネは、アマテラスが中心となつた所伝にしか登場しない神で、しかもその果している役割は、アマテラスの下にあつて相当に重要なものであつた。そのような神が、天孫降臨に深く関わりを持つ重要な神格であるタカミムスヒと親子関係になつてゐるというのは、例えば同一段の一書で、アメノコヤネがコゴトムスヒの子であつたり、アメノアカルタマがイザナキの子であつたりするのは別の次元の事であると見るべきだろう。

即ちこれは、「タカミムスヒとアマテラス」という文脈の中で考えられるべき事柄なのである。

つまり、天の岩戸条（書紀第七段）にある「タカミムスヒの子オモヒカネ」という記述は、段落を跳び越えて天孫降臨条（書紀第九段）に見られる「オモヒカネの妹ヨロヅハタトヨアキツヒメをオシホミミの妃とした」（書紀第一の一書）と言う記事と呼応し、その事によつて、アマテラスとタカミムスヒをホノニギに収斂させる系譜を形造る事になる。そうなつてはじめてこの記述が生きて来るのではないだろうか。

こう考えるならば、書紀の本文にオモヒカネをタカミムスヒの子とする記述が無く、古事記にはそれが存在するという事も、両所伝の性格を象徴的に表わしていると解される。

即ち、書紀の方については、先に、「本文というのは一貫した流れの中にある」という事を想定したが、この観点からすれば、第九段の本文で、明瞭に、タカミムスヒと「ハタ」ヒメの親子関係を示している以上は、オモヒカネをタカミムスヒの子として位置づける事に、積極的な意味を見出す事はできない。

一方で、オモヒカネをタカミムスヒの子と記した古事記は、アマテラスとタカミムスヒを融合的に扱っているものの、アマテラスが主体となりつつある段階と見られるのであって、<sup>(15)</sup>その数歩先には、書紀第九段第一の一書のような、アマテラスのみが中心となるタイプの所伝が予測できる。

従って、第一の一書にオモヒカネを「ハタ」ヒメの兄としているのは、天の岩戸条に、「タカミムスヒの子オモヒカネ」となっているのを伏線として、<sup>(16)</sup>天孫降臨神話の周辺からタカミムスヒの名を一步遠ざけ、アマテラス化の完成を目指したものと考えられよう。それは、書紀第九段本文が、先に触れた通り、全くタカミムスヒを中心とした所伝であるところに、系譜記事を掲げる事だけで、アマテラスとの関係を表現したのと当に好対照である。

ただし、いま、書紀本文第九段第一の一書が、天の岩戸条の記述を伏線としているという事を述べたのだが、誤解を招かぬよう、最後に一言付しておきたい。

筆者は、書紀で唯一オモヒカネをタカミムスヒの子とする記述のある第七段第一の一書と、同じく唯一「ハタ」ヒメの兄にオモヒカネを充てている第九段第一の一書とが、そのままに、もともと一続きの伝承を成していたと考えているわけではない。もちろん、その可能性を否定はしないが、一続きに記されている古事記や、一貫するべき宿命の本文などと、そのような制約を持たない書紀の一書どうしの事は、全然別の事として考えるべきである。従って、筆者としては、第七段第一の一書と、第九段第一の一書とは、それぞれに、少くとも右に述べた如き経緯のそれぞれの段階の一樣相を示していると考えるのである。

以上、天孫降臨神話を軸として、そこにオモヒカネの事をからませながら、記紀神話体系の形成される過程の極く一端について論じて来た。ただ、中で触れておくべきと思いつつ触れなかった問題点が二つある。

書紀第九段の第二の一書の特異性と、太陽神話の「アマテラス」と「ヒノカミ」の新旧の問題である。

これらについて、筆者は既に一通りの論を用意しているが、ここでこの二点を論じる事は、却って論が多岐にわたり過ぎて本稿の焦点をばかす恐れがあると判断した。よって、右の二つの問題は、別途に稿を改める事としたい。

〔注〕

- (1) 三品彰英「三品彰英論文集」（平凡社）収載の諸論文。
- (2) 松前健「古代伝承と宮廷祭祀」（塙書房）
- (3) 拙稿「葦原中国の主神をめぐって」△学習院大学上代文学研究第6号所収▽
- (4) 吉井徹氏は「古事記の作品的性格」△石井庄司博士喜寿記念論集上代文学考究（塙書房）所収▽の中で、古事記は日本書記と異なった立場によっているのであるとされ、日本書紀の各異伝と一緒に並べて、異伝の新旧を論ずる材料の一つとして扱う方法を否定しておられる（p.91）。しかし筆者は、前掲論文での考察の結果から見て、古事記も、日本書紀の本文や一書とほぼ同列に、一つの異伝として扱って差支えないと考える。
- (5) 金井精一「降臨神話の原型と展開」△講座日本文学・神話上（解釈と鑑賞別冊）▽p.102～p.103
- (6) 拙稿・前掲論文
- (7) 拙稿「高木神の性格とタカミムスヒ」△古事記年報（二十四）所収▽（古事記学会）
- (8) 日本古典文学大系・日本書紀上（岩波書店）（p.153）頭注二三
- (9) 天の岩戸条と天孫降臨条が一体である事を説いた比較的早いものとしては、例えば倉野憲司「日本神話」△日本文学大系（河出書房）▽（p.143～p.177）が挙げられる。
- (10) 最近では、北川和秀氏が、この二通りの神名表記を手がかりとして、書紀の各段の各異伝を、二つの系統に分類整理さ



れている。同氏「古事記上巻と日本書紀神代巻との関係」〔文学第四十八巻第五号所収〕

- (11) 人によって他少ニユアンスの違いがあるが、大体、スサノヲのヲロチ退治から、オホナムチの国作りのあたり迄を言う事が多い。

- (12) 拙稿・前掲（7）

- (13) 第五段には、太陽神の誕生について四種の異伝を録し、その四異伝が全て異なる名称を用いている。その中で、古事記と同じ単性生殖型の話を伝える第六の一書だけがアマテラスを用いている。古事記がアマテラスであるのは言うまでもない。

- (14) 第一の一書「大日靈尊」・第二の一書「日」・第六の一書「天照大神」

- (15) 本論文 p.159

- (16) つまり、オモヒカネが初めて神話に顔を出すところで、タカミムスヒの子である事を規定しておくわけである。

- (\*) 本稿での記紀の引用は、両書とも、古典大系本の訓み下しに従った。